



Title	太宰治『畜犬談』論：方法としての＜笑い＞
Author(s)	斎藤, 理生
Citation	阪大近代文学研究. 2003, 1, p. 51-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92616
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

太宰治『畜犬談』論

— 方法としての〈笑い〉 —

斎藤 理生

一 問題の所在——〈笑い〉と〈深刻〉

昭和十四年初秋、甲府から帰京した太宰治は、『畜犬談』（『文学者』十月）という小説を発表した。大の犬ざらいである「私」がポチという子犬を飼うはめになり、対処に困るがしだいに親しみを覚え始め、最後には共生することですららの芸術家としての〈再生〉を誓う、という粗筋の小説である。同年の春に発表した『女生徒』（『文学界』四月）ほど大きな反響はなかったものの、文壇における『畜犬談』の評価は概ね好意的なものであった。ただその評価には、それまで太宰の作品に付されてきたものとは趣の異なるところが見受けられる。

● 太宰君の「畜犬談」は快作である。読んでみてこんな愉しい小説はなかった。（榊山潤）（傍線は引用者による。また：は中略を表す。以下同じ）

● 太宰治氏の「畜犬談」（『文学者』十月号所載）は、甚だ面白かつた。面白かつた、と云つてしまふと、もう私の

感想は尽きて了ふ。何故面白かつたかどう面白かつたか、を書かぬと批評にも感想にもならぬので、実は弱つてゐる。しかし、この小説は面白かつた。（尾崎一雄）

● 例へば太宰治といふ人は、この前「犬」とかいふ短編を書いたのはユーモア作家としての或る才能を示したものであつたが：（長与善郎）^①

〈笑い〉をくみとつた言葉がこれほど太宰の作品に付されたことはなかった^②。『畜犬談』について右のような読後感が一般的であつたことは、翌年太宰が発表した随筆「このごろ（3）」（『国民新聞』昭和十五年二月一日）に、「昨年の秋に、私が或る雑誌に犬のことを書いたら、二、三の知人から大いに面白かつたと褒められて」とあることからもうかがえる。また太宰は戦後、創作集『玩具』に収録するさい、自らこの小説を「滑稽物語」としている^③。

研究史においても『畜犬談』には〈笑い〉が指摘されてきた。濱川勝彦氏は、先の尾崎一雄の評を踏まえて、「単純な表現上の滑稽から大袈裟な恐怖や憎悪に伴う滑稽、犬と

の同化によつて全ての前提が無化する滑稽等々、重層するユーモアを内在した作品」と見ている³。柴口順一氏は、「徹頭徹尾〈滑稽物語〉あるいは〈ユウモア小説〉として読むこと、読もうとすることが重要」と述べている⁴。丸山俊氏は「ユーモア小説として十分通用する」と言い⁵、小林幹也氏は「ほのぼのとした笑い」をくみとつて⁶いる⁷。だがそのような評価の一方で、『畜犬談』は、作家その人の〈深刻〉な心情や思想を読まれることも少なくない。同時代には、「ここに書かれた犬に対する愛情を、単に犬に対してのみの愛情とは、感じさせない作者の心が伝はつて来る」（神田鶴平）、「畜犬談」には太宰氏の第一創作集「晩年」以後この作品にまで達し得た氏の魂の成長の跡を感じる事が出来る」（鎌原正巳）といった評があった⁸。

研究史においては、早く奥野健男によつて「前期の意識をもつて、中期の自己を裁く悔恨の系列」の作品群の中に位置づけられていた⁹。渡部芳紀氏は「人間不信にとらわれていた太宰が、そこからの脱出のために書いた」作品だとしている¹⁰。最近のものでは、「弱者の友」であることが芸術家にとつての出發であり、究極の目的だとする結末部分はそのまま太宰自身の本音と考えていい」とする鶴谷憲三氏の見解がこうした評価の系列にあると言える¹¹。

つまり、もっぱら〈笑い〉を読むものと、当時の太宰の〈深刻〉な心情や思想をくみとるものと、『畜犬談』は二様の評価をなされてきたのだ。そして従来の論では、どちら

か一方の読みが重視される余り、もう一方の読みが過小に扱われてきたきらいがある。だがこの小説において〈笑い〉と〈深刻〉さとは、排斥し合う関係にはないのであるなからうか。

以下、本論では、『畜犬談』をその語りを中心に分析すること、で、〈笑い〉と〈深刻〉さがそれぞれどのように立ち現れ、関係しているのかを確かめつつ一篇の仕組みを明らかにする。その考察は、太宰治の作品が持つ〈笑い〉の意味を捉える手がかりになるはずである。

二 距離を生み出す語り

『畜犬談』の語り手「私」は、その特異な犬観によつて特徴づけられる。この「私」の犬観に、無批判に同調する読者というのはいかに考えにくい。ただし、読者がそこで距離を感じさせられる理由を、語り手が犬を（非常識）なまでに恐れていることだけに求めるべきではない。恐怖の内容だけでなく、それがいかに語られているかという点にも目を向ける必要がある。

私は、犬に就いては自信がある。いつの日か、必ず喰ひつかれるであらうといふ自信である。私は、きつと嘯まれるにちがひない。自信があるのである。よくぞ、けふまで喰ひつかれもせず無事に過して来たものだと思ひ氣さへしてゐるのである。諸君、犬は猛

獣である。馬を倒し、たまさかには獅子と戦つてさへ之を征服するとかいふではないか。さもありなむと私はひとり淋しく首肯してゐるのだ。

小説の冒頭であるが、まず注目されるのは大仰な言葉づかいであり、「である」「のである」「ちがひない」といった断定、および「とかいふではないか」という問いかけである。こうした語り口からは、「私」が自分の犬観を固く信じていることはもちろん、その犬観を「諸君」に納得させようとしていることがうかがえる。すなわち彼は、聞き手に自分とは異なる犬観の持ち主を想定しているのである。

そのような聞き手に向けて、語り手は、次のように世間一般の犬観の異常さを訴える。

世の多くの飼ひ主は、自ら恐ろしき猛獣を養ひ、之に日々わづかの残飯を与へてゐるといふ理由だけにて、全くこの猛獣に心をゆるし、エスや、エスやなど、気楽に呼んで、さながら家族の一員の如く身辺に近づかしめ、三歳のわが愛子をして、その猛獣の耳をぐいと引つばらせて大笑ひしてゐる図にいたつては、戦慄、眼を蓋はざるを得ないのである。

ここで「私」は、犬を「猛獣」と呼び換え続けていることに明らかなように、自分の犬観を前提にしたうえでしか語っていないので、説得力に乏しい。そのため読者は語り手の見解を受け容れることなく、かえつてその聞き手への熱心な語りかけを、距離を置いて見つめることになるう。

飼ひ主でさへ、噛みつかれぬとは保証でき難い猛獣を、（飼ひ主だから、絶対に喰ひつかれぬといふことは愚かな氣のいい迷信に過ぎない。あの恐ろしい牙のある以上、必ず噛む。決して噛まないといふことを、科学的に証明できる筈は無いのである。）その猛獣を、放し飼ひにして、往來をうろうろ徘徊させて置くとは、どんなものであらうか。

ここでは、語り手は唐突に「科学」を持ち出し、「迷信」を喝破したつもりになっている。そして「どんなものであらうか」と問うているあたり、彼は「諸君」に犬の恐ろしさを少しはわかつてもらえたと思つてゐるらしい。だが読む側としては、その自信すら垣間見える問いかけにいつそう距離を感じさせられるばかりであらう（12）。

つまり、《非常識》な犬観の内容だけでなく、その訴え方、他者の犬観に対する排斥の仕方が語り手の偏りを表しているのである。したがって読者は現実には大好きであろうとなかろうと、この小説を読むうえでは等しく「私」に共感したい思いをさせられることになる。

そして注意するべきは、「私」が語り進む過程でさらに思いこみを深めていることだ。ここまでの引用でも、「猛獣」と口にするごとに犬への恐怖を募らせていることがうかがえたが、次にあげる部分からも、恐怖が語るうちに強まっていることがわかる。

● 馬を倒し、たまさかには獅子と戦つてさへ之を征服する

とかいふではないか。さもありなむと私はひとり淋しく首肯してゐるのだ。

●不意に、わんと言つて喰ひついたら、どうする氣だらう。氣をつけなければならぬ。

語り手は「諸君」に問いかけつつ、すぐ後で自らうなずき、あるいは心がけている。いわば彼は自問自答して確信を深めているのだ。

また、このあと語り手は、犬は「もともと馬を倒すほどの猛獣である。いつなんどき、怒り狂ひ、その本性を曝露するか、わかつたものでは無い」と述べる。「……とかいふではないか」と伝聞として語られたばかりの内容が、後では無批判のままに考察の前提になっている。すなわち、犬の恐ろしさを訴えるために口にした自らの言葉によつて、「私」は想いをより頑なにしてゆくのである。

このような語りの構造は、犬の恐ろしさの具体例として、犬に噛まれた「傷ましい犠牲者」である「友人」の話をつる部分にも認められる。「それから二十一日間、病院へ通つたのである。三週間である」「とたん、わんと言つて右の脚に喰ひついたといふ。災難である。……とにかく之は、ひどい災難である。大災難である」「恐水病といふいまはしい病気の毒が……恐水病といつて、……凄惨な病気になるかも知れないといふことなのである」など、「猛獣」に限らず、この語り手は、同じ内容の言葉をくり返す傾向を持つ。それは聞き手に犬の恐ろしさを印象づけるためであらう。しかし

聞き手に向けているはずの言葉は、まず語り手じしんに強く作用している。右のように犬に噛まれることの恐ろしさをくり返したあと、彼は「友人」の「憂慮、不安は、どんなだつたらう」と思ひをはせ、空想を広げてゆくのである。

友人は苦勞人で、ちゃんとできた人であるから、醜く取り乱すことも無く、三七、二十一日病院に通ひ、注射を受けて、いまは元氣に立ち働いてゐるが、もし之が私だつたら、その犬、生かして置かないだらう。私は、人の三倍も四倍も復讐心の強い男なのであるから、また、さうなると人の五倍も六倍も残忍性を發揮してしまふ男なのであるから、たちどころにその犬の頭蓋骨を、めちやめちやに粉碎し、眼玉をくり抜き、ぐしやぐしやに噛んで、べつと吐き捨て、それでも足りずに近所近辺の飼ひ犬ごとくを毒殺してしまふであらう。

もし自分が噛みつかれたら町中の犬を毒殺してやる、などという不条理で残酷な考えは、(常識)的に受け容れられるものではない。だがここでもその語られ方が注目される。「二十一日」が再び持ち出され、「三倍も四倍も」が「五倍も六倍も」に膨らみ、「めちやめちや」「ぐしやぐしや」「べつ」と擬音語が多用される。ここには、聞き手に語っているうちに妄想に踏みこんでしまっている様子が明らかである。そのため語り手の言葉は、読者の反感ではなく(笑ひ)を誘うのである。

尾崎一雄は、『畜犬談』の「面白さ」の理由として、「私」の「一人角力」をあげていたり。この尾崎の言は、単に「私」が独りよがりな犬観に脅かされているという内容面だけではなく、聞き手に犬の恐ろしさを語る自らの言葉に触発されて思いこみを深めてゆく、語りの構造を什么的確に捉えていると言える。

三 〈愚かさ〉のあらわれ——語りの時間と共に

「ことしの正月」甲府に移り住んだ話以降、語り手は犬と対峙した実体験を語るようになる。しかし回想形式をとっていないが、〈語りの現在〉の「私」が、〈過去〉の自分の思考や行為について評価を下すことは稀である。多くの場合、彼はその時々々の気持ちを中心に語っている。それは〈いま〉を示す語の使われ方に明らかである。

たとえば、甲府には夥しい数の犬がいたが、それらに媚びた結果「犬は私には、いまだ飛びかかつて来ない」と語り手は述べる。この文は、冒頭にある「よくぞ、けふまで喰ひつかれもせず無事に過して来たものだ」という文と内容が呼応している。一見〈語りの現在〉の認識のように見える。しかし犬への媚びは「ここに意外の現象が現はれた。私は犬に好かれてしまったのである」という予想外の結果に行き着くから、「いまだ飛びかかつて……」という認識は、犬に媚びようと思いついた時点よりは〈未来〉であ

り、「意外の現象が現はれ」るよりは〈過去〉、という中間の時点における認識だということになる。

また、犬に好かれてしまったあと語り手は、よりよつて「かねがね私の、こころよからず思ひ、また最近にいたつては憎悪の極点にまで達してゐる」犬に、と嘆く。この文は、「昨秋、友人の遭難を聞いて、私の畜犬に対する日頃の憎悪は、その極点に達した」という文と呼応する。したがつて前の文の「最近」は、〈語りの現在〉に近い時期ではなく、「昨秋」から遠からぬ時期を指していることになる。さらに、犬に媚び過ぎたことに気づいて「私は、未だに、どうも、節度を知らぬ」と述べる部分にしても、その〈いま〉が犬に好かれた直後以外を指すとは考えにくい。

つまり、『畜犬談』には〈いま〉を示す言葉が少なくないが、その〈いま〉は語られる内容が生起してから遠からぬ時点を指すに過ぎず、〈語りの現在〉と一致するわけではない。語り手はこの後も、「早春のこと」「そろそろ秋風ふき始めてきた現在」「七月にはひつて」といった時候を示す言葉を口にする。が、そこでも出来事の進展とそのつどそのつどの自分の気持ちを中心に語られるだけで、すべてが終わった時点での認識は前に出てこないものである（註）。

このような語り方には、その時々々の心情を具体的にはつきりと伝えられるという利点がある。だがそれは、〈過去〉を相対化する視線を弱くしてしまうことでもあるだろう。

甲府で夥しい数の犬と対峙した「私」は、噛みつかれな

いように対策を「まじめに、真剣に考へた」。「言葉が役に立たぬ」ため、「しつぽの動き」にも気をつける。だが最終的に彼が編みだした「窮余の一策」なるものは、「微笑」や「童謡」によつて「いささかも害心のないことを示」し、「やさしい人間であることを知らせよう」とするものであつた。つまり、彼は先に人間的な意思伝達を不可能だと嘆じておりながら、結局はそれに頼つてしまつていたのである。

犬に媚びる行為は結果的には失敗に終わる。だが「私」には媚びによつて事態がうまく運んでいふと思ひこんでいた時期もあつた。「童謡を口ずさむ」ことで犬を回避しようとしていたときの気持ちは、「之等は、多少、効果があつた気がする。犬は私には、いまだ飛びかかつて来ない。けれどもあくまで油断は禁物である」と語られる。このように語っている（いま）の気持ちのように表されることで、読者の目には、犬に媚びるふるまいのみならず、そのような行為に対する認識さえも滑稽に見えてくるはずである。

また「私」は、犬に媚びることを「甚だ拙劣な、無能きはまる一法」だと言う。彼は自分の行動の異様さに無自覚なわけではないのだ。しかしその自覚はあくまで情けない身振りをしてしまつていふことに止まつていふ。「犬の心理を計りかねて、ただ行き当りばつたり、無闇矢鱈に御機嫌とつてゐるうちに」「好かれてしまつた」と言う彼が嘆いてゐるのは、あくまで対策の失敗であり、対策を立てることそのもの、言い換えれば犬の心理を推し量ることの有効性

は信じられてゐる。「あまりに犬の猛獣性を畏敬し、買ひかぶり、節度もなく媚笑を撒きちらして歩いたゆゑ……このやうな情けない結果に立ちいたつたのであらう」と反省するところも同じだ。彼は、そもそも犬と人間的な意思伝達は可能か、という点は疑わなくなつてゆくのである。

犬への大仰な言動はそれ自体（愚かさ）を表している。ただそれをその時々認識のままに語るために、前後の考えのくいちがひや失敗の後も気づかないという面での（愚かさ）をも、語り手は露呈してしまふのである。

四 〈理解〉を促す語り——くり返される表現から

だが、物語の進展に従つて、語りの受け取られ方は少しずつ変わつてゆくと思われる。その変化を考えるにあつて、まず「私」が犬を嫌う理由の変化を確認する。

犬を嫌う理由の変化は、牙をめぐる表現に端的に表れてゐる。冒頭で語り手は、「あの犬の、鋭い牙を見るがよい。ただものではない」「あの恐ろしい牙のある以上、必ず噛む」と述べ、甲府の「往來に、或いは付き、或いはながながと寝そべり、或いは疾駆し、或いは牙を光らせて吠え立て」る犬たちを恐れていた。ところが、犬に好かれてしまつた後には「獅子をも倒す白光鋭利の牙を持ちながら」人間に媚びるから犬は嫌いだ、と言うようになる。はじめは牙に代表される犬の「猛獣」性を恐れ憎んでいたのに、途中で

らは、力はあるのに「人間界に屈服し、隷属し」ているさまを憎むようになるのだ。

こうした犬を嫌う理由の変化は、嘯まれないために犬に媚びて、かえって好かれてしまった後のことである。「私」は、犬に媚びていた頃には「つくづく自身の卑屈がいやになる。泣きたいほどの自己嫌悪を覚える」とこぼしていた。しかし犬に好かれてしまった。それから犬の卑屈さを非難するようになった。注目するべきは、このような展開において、犬と自分に同じ嫌悪の言葉が投げかけられていることだ。

語り手は「無闇矢鱈に御機嫌とつてゐるうちに」「犬に好かれてしまった」と述べる。ところが、そのあと彼は犬を嫌う理由に「人間の御機嫌を取り結ばうと努めてゐる」ことをあげるのだ。また、かつて「私」は、犬の傍を通るとき「卑しい追従笑ひを浮べ」ていた。そんな彼が、犬に好かれてしまった後には、犬の「飼主の顔色を伺ひ、阿諛追従」するさまを非難する。

こうした表現のくり返しから、「私」が犬に自分のネガを見るようになり、それゆえに嫌う理由も変わってきたとわかる。彼が犬に自己嫌悪の視線を向けているという指摘はこれまでもあった⁽¹⁵⁾。しかしここでは、二つの嫌悪の類似は、「思へば思ふほど、犬は不潔だ。犬はいやだ。なんだか自分に似てゐるところさへあるやうな気がして、いやいよ、いやだ」と語り手がこぼす前から、「御機嫌をとる」

「追従」等の言葉の反復によって明らかだという点を重視したい。語り手は「思へば思ふほど」、つまり同じ言葉の頭の中で巡らせているうちに自分と犬との類似に気づいたようなのだ。

また、「私」がポチをどう見ているかも表現のくり返しからうかがえる。彼はポチを見て、「嘯まれたら病院に三、七、二十一日間通はなければならぬ」と、前に見た「友人」が嘯まれた話で使った犬の恐ろしさを示す表現を再び使って恐れている。さらに、「私」は以前、犬は「いつなんどき、怒り狂ひ、その本性を曝露するか、わかつたものではない」と恐れ、「組んづほぐれつ格闘の稽古にふけ」る甲府の犬たちに怯えていた。だがポチも大人しかったのははじめだけで、「そのうちに、いよいよ隠して在った猛獣の本性を曝露して来た。喧嘩格闘を好むやうになつた」という。

このように、ポチの恐ろしさを語る表現は、かつて犬の恐ろしさを語るさいに使われた表現と同じであることが多⁽¹⁶⁾い。そのため読者は、「私」が犬一般に感じていた恐れをそのままポチに見てしまっていることを読み取るのである。その後ポチは、喧嘩をするなど何度も言い聞かされ、また「シエパード」に惨敗を喫したゆえに「卑屈」になってしま⁽¹⁷⁾う。すると「私」は今度はその卑屈ぶりをとがめ始めるのだが、そこでのポチへの言葉がやはり、かつて犬の卑屈さを非難していた言葉と重なる。

以前「私」は、犬は「ただひたすらに飼主の顔色を伺」

っていると責めていた。ところがポチも「ひたすら私の気に入られようと上品ぶつて、私の顔色を伺う」ようになってしまふ。「私」は妻に、ポチは「ひとの顔色ばかり伺つてゐやがる」とこぼす。また、「私」は犬の「阿諛追従」として恥ぢないさまを非難していた。だがポチも「へつへつ」と卑しい追従笑ひするかの如き態度を取るようになったと言ふのである。

「私」はポチに、犬の恐ろしさのみならず卑屈さをも見出してゐた。したがつて犬の場合と同様に、ポチへの非難は「私」自身にも当てはまることになる。先に述べたように、ポチは主人に「卑しい追従笑ひ」をするようになった。このポチのふるまいは、かつて「私」が甲府の犬に「にこにこ卑しい追従笑ひを浮べて」いたことと酷似している。また、ポチは主人に「卑屈なほど柔軟な態度をとりはじめた」。このことは「私」が「つくづく自身の卑屈がいやになる」ほど犬に媚びてゐたことを思い出させる。

嫌っている犬やポチにかかずらう「私」の姿は滑稽にちがいない。読者は依然として彼の大批判に（愚かさ）を感じるだらう。が、冒頭とは異なり、ここでは彼の犬への意見が偏る理由もほのめかされている。「私」が犬やポチに自分と同じものを見出してしまふがゆえにいつそう嫌つてゐることがうかがえるのだ。したがつて『畜犬談』もここに至ると、單純に語り手の偏つた思いこみを笑うような読まれ方はされなくなつてくるはずである。

五 〈空白〉の効果

小説の途中からは、「私」の偏つた思いこみには何らかの事情があることがうかがえるようになる。その印象は、物語のそこかしこで「私」の境遇がほのめかされることによつて補強されている。たとえば次の引用部分。

あまりに犬の猛獸性を畏敬し、買ひかぶり、節度もなく媚笑を撒きちらして歩いたゆゑ、犬は、かへつて知己を得たものと誤解し、私を組し易しと見てとつて、このやうな情ない結果に立ちいたつたのであらうが、何事によらず、ものには節度が大切である。私は、未だに、どうも、節度を知らぬ。

犬に媚び過ぎたという反省は、なぜか唐突に、より広義の反省に移行してしまふ。その理由は語られていない。

似た例として、「ことしの正月、山梨県、甲府のまちはづれに八畳、三畳、一畳といふ草庵を借り、こつそり隠れるやうに住み込み」という部分があげられる。ここでも「私」が「隠れるやうに」せねばならなかつた理由は不明である。

そしてとりわけ注目されるのが、「性格が破産しちやつたんぢやないかしら。」という「家内」のポチ評と、それに対する「飼ひ主に、似て来たといふわけかね。」私は、いよいよ、にがにがしく思つた」という反応である。「家内」が笑いながらポチに言つた「性格が破産」という言葉に、「私」

は過敏に反応してしまう。ここでもその理由は語られていないが、以上のような箇所が〈空白〉になっていることが、逆に「私」の置かれている境遇を物語っているのである。

太宰治は、『畜犬談』と同じ年に書いた『富嶽百景』（二文体）（二・三月）でも〈性格破産〉という語を使っている。

実は、もう二、三人、僕の仲間がありまして、皆で一緒に邪魔にあがるつもりだったのですが、いざとなると、どうも皆、しりごみしまして、太宰さんは、ひどいデカダンで、それに、性格破産者だ、と佐藤春夫先生の小説に書いてございましたし、まさか、こんなまじめな、ちやんとしたお方だとは、思ひませんでしたから、僕も、無理に皆を連れて来るわけには、いきませんでした。

実は、ここで当然想起されるであろう佐藤春夫『芥川賞——憤怒こそ愛の極点（太宰治）——』（『改造』昭和十一年十一月）の中に、〈性格破産〉にあたる語は無い。にもかかわらず太宰はあえて〈性格破産〉という語を用いた。それは、事ありげな語を唐突に述べ、そこに説明を加えないことで生まれる効果を計算していたためにちがいない。

『畜犬談』においても同じ計算が働いていると考えられる。喧伝される〈太宰治〉をよく知る読者は、先にあげたような〈空白〉を、作品外の知識の導入によって穴埋めすることで「私」の苦悩にリアリティを感じるだろう。〈太宰治〉を知らない読者、あるいは作家と作中人物を切り離し

て読む者にとつても、〈空白〉は、語られていないからこそかえって想像力を刺激し、「私」の過激な発言の裏に何らかの事情を思い描かせるものになっているのである。

六 背後を読まれる語り

小説の展開に連れて、犬（ポチ）への非難は、その裏に「私」の事情を読み取られるものになってゆく。そしてポチへの非難は、「家内」が表舞台に現れてから、さらに複雑な意味を帯びてゆくことになる。

この作品における「家内」の機能について、濱川勝彦氏は「妻の発言や態度が、冷静ならざる「私」によって捉えられ語られるため、微妙に屈折して表現されている。その屈折度を計ることによって、かえって「私」の有りようが理解される」と述べている。たしかに氏が指摘するように、「家内」がポチに「あまり、へんにかまふ」夫の姿を口にするところだけでなく、「私」が「家内は、はじめからポチに無関心であつた」などと言うところからも「妻の冷静さ」と対照的な「私」の熱狂ぶり」が読み取られる。ただ、彼のポチへの親しみの情そのものは、それ以前からうかがい知れよう。

いちど小牛のやうなシエパードに飛びかかつていつて、あのときは、私が蒼くなつた。…それに私は、喧嘩を好まず、否、好まぬどころではない、往來で野獸の組

打ちを放置し許容してゐるなどは、文明国の恥辱と信じてゐるので、かの耳を聳せんばかりの犬の野蠻のわめき声には、殺してもなほあき足らない憤怒と憎悪を感じてゐるのである。私は、ポチを愛してはゐない。恐れ、憎んでこそゐるが、みちんも愛しては、ゐない。死んで呉れたらいいと思つてゐる。

ここでは、いったん語り始められた内容が突然「否」と覆され、そのあと急に極端な言葉が畳みかけられてゐるために、別の気持ちたちが隠されてゐるように読める。また、「愛してはゐない」とことさらに二度も打ち消していることは、かえつて逆の気持ちを想像させる⁽¹⁶⁾。過剰性を帯びた語り口は、ポチを氣遣う一方でそうした気持ちを抑えようともしている。「私」のアンビバレントな想いを浮かび上げさせるのである。

「連れて行つたつて、いいのに。」家内は、やはりポチをあまり問題にしてゐない。どちらでもいいのである。／「だめだ。僕は、可愛いから養つてやつてゐるんだやないんだよ。犬に復讐されるのが、こはいから、仕方なくそつとして置いてやつてゐるのだ。わからんかね。」／「でも、ちよつとポチが見えなくなると、ポチはどこへ行つたらう、どこへ行つたらうと大騒ぎぢやないの。」／「ゐなくなると、一さう薄気味が悪いからさ。僕に隠れて、ひそかに同志を糾合してゐるのかもわからない。あいつは、僕に軽蔑されてゐることを知

つてゐるんだ。復讐心が強いさうだからなあ、犬は。」妻は何かとポチにかまう夫の姿を指摘する。それに対して「私」は強引なこじつけによつて、怖がついてゐるだけだと説明する。しかし、彼の答弁がこゝも極端になっているのは、妻の指摘を打ち消すただけではないだろう。取つて付けたように語られる「復讐」への恐怖は、自分に言い聞かせてゐる面が強いと思われる。

この後の「あんな犬、東京へ連れて行つたんぢや、僕は友人に対して恥かしいんだ。胴が長すぎる。みつともないねえ」という発言も同じである。この発言は、形のうえでは「家内」に向けられてゐる。だがポチを「可愛い」と言う妻に対して「みつともないねえ」と水を向けても、同意は得られないだろう。「私」もそれを知らないわけではあるまい。彼はポチの欠点をことさらに口にすることで、自分のなかの嫌悪をあらためて呼び起こし、親しみを抑え、捨てることの罪悪感を振り切ろうとしてゐるのである。

小説の後半部に至つて、語りの構造は、冒頭とは似て非なるものになつてゐる。犬(ポチ)を恐れ非難する言葉が顔面どおりに受け取られないという点は同じでも、ここではもう、嫌悪していること自体が信じられなくなつてゐる。読者は、恐怖や非難はポチへの親しみを「家内」にも自分自身にもごまかすために発せられてゐるのだと、「私」を(理解)して読むようになってゐるのである。

七 「再生」と「家内」の表情

「私」がポチへの愛を、言葉の裏に読ませる形ではなく、はつきりと表明するのは、皮膚病になったポチを殺しに行く途中、「赤毛の犬」と遭遇する場面においてである。その格闘の場面で彼は、「おれは噛み殺されたつていいんだ。ポチよ、思ふ存分、喧嘩をしろ！」とポチに入れこむ。そうまで思い詰めるに至ったのは、同じ犬でも、ポチには「赤毛の犬」に無いものを見出しているからである。

途中、おそろしく大きい赤毛の犬が、ポチに向つて猛烈に吠えたてた。：赤毛は、卑劣である。無法にもポチの背後から、風の如く襲いかかり、ポチの寒しげな睾丸をねらつた。

「赤毛の犬」は、その外見においても、卑劣な性質においても、「私」の嫌いな犬を体現している。一方のポチは、襲撃されてもすぐには反撃せず、私の顔色をそつと伺つたと、再び卑屈なふるまいを示してしまふ。

だが「私」は、卑屈さに対しては以前のように嫌悪感を示さない。それどころか、「赤毛は卑怯だ！ 思ふ存分やれつ！」と戦うことを命じ、卑屈なポチを応援する。ポチもその期待に応え、「赤毛の犬」を追い払ふ。

追い払つてからもポチは、「立ち止まつて、私の顔色をちらと伺ひ、急にしよげて、首を垂れすごす私のほうへ引返して来た」と、へりくだった態度を取る。そんなポチを、

「よし！ 強いぞ」と褒める「私」は、明らかに卑屈さを擁護する立場に立っている。

だが、彼はもともと殺すために家を出て来たのであつた。仕方なくポチに毒肉を与え、茫然自失して帰途につく。その帰り道では、「猫背になつて、のろのろ歩いた」「一そうひどい猫背になつて、のろのろ帰途についた」と頭を垂らした姿勢が強調されている。

一方、死なずに後をついて来ていたポチは、「面目無げに、首を垂れ、私の視線をそつとそらした」。ここでのポチは、やはり卑屈にふるまっていることと共に、「首を垂れ」ていることが注目される。終盤にくり返し描かれるポチのこの姿勢は、「猫背になつて」歩く「私」の姿と対応しており、主従の共通する部分を物語っている。

卑屈さを擁護しようという態度と、再び描かれる主従の類似。末尾の「私」がポチとの共生を妻に述べる場面は、これらを念頭に置いたうえで読まれねばならない。

「だめだよ。薬が効かないのだ。ゆるしてやらうよ。あいつには、罪が無かつたんだぜ。芸術家は、もともと弱い者の味方だつた筈なんだ。」私は、途中で考へて来たことをそのまま言つてみた。「弱者の友なんだ。芸術家にとつて、これが出発で、また最高の目的なんだ。こんな単純なこと、僕は忘れてゐた。僕だけぢやない。みんなが、忘れてゐるんだ。僕は、ポチを東京へ連れて行かうと思ふよ。友達がもしポチの恰好を笑つたら、ぶん殴

つてやる。卵あるかい？」／「ええ。」家内は、浮かぬ顔をしてゐた。／「ポチにやれ。二つ在るなら、二つやれ。おまへも我慢しろ。皮膚病なんてのは、すぐなほるよ。」／「ええ。」家内は、やはり浮かぬ顔をしてゐた。

「私」はポチを飼ひ続け、「弱者の友」である「芸術家」として再出発すると言う。しかし「家内」はその発言を「浮かぬ顔」で聞いている。従来この末尾は、作家の「深刻」な思想を読みとろうとする論には「私」の言葉を、〈笑い〉を読みとろうとする論には「家内」の表情を中心に読まれる傾向にあつた。だがここでもその両方をくみとるべきなのではないか。

小説のここまでの文脈を踏まえれば、「私」が自分と似て卑屈な「弱い者」を守ることと立ち直ろうとしていることは、読者に〈理解〉しがたいものではなからう。「私」は以前から密かにポチに親しみを抱いていたが、それだけではなく、この朝の一連の出来事によつて卑屈さを擁護する立場に移行してから再び飼おうと言っているのである。主従は、ポチ殺害をまったくためらわなかつた「家内」にはうかがい知れない深い関係を結んでいる。

だが「私」は一方で、「途中で考へて来たことをそのまま言つてみ」ているうちに、「ぶん殴つてやる」という乱暴な発言や、「皮膚病なんてのは、すぐなほる」という根拠のない断言をものしている。つまり、彼はここでも冒頭と同じように、語りながら主張を頑なにしていっているのだ。「家

内」の「浮かぬ顔」とは、そうした夫の硬直したありようを相対化し、ポチとの共生による〈再生〉が、そう易々と達成されるはずのないことを暗示するものに他ならない。

ポチの〈再生〉に「私」の「芸術家」としての〈再生〉を重ね合わせることに。そこに一篇の狙いがあることはまづがない。にもかかわらず〈再生〉によつて得た「私」の考えが素朴に受け取られるものにされていないのは、そもそこでも「私」が口にしてゐる〈弱さ〉の価値が、その性質上、大声で打ち出されてしまつては途端にその本来の意味を台無しにしてしまうものであつたからではないか。〈弱さ〉をにかけて他者を抑圧するという逆説。それを避けようとすれば、「私」の言葉は絶対化されてはならない⁽¹⁸⁾。「私」の〈弱さ〉の称揚は、その訴え方を語りの過剰と「家内」の表情による〈笑い〉で相対化されることでそれ自体に〈弱さ〉を内在させられることによつてかろうじて成立しているのである。

八 太宰治作品の〈笑い〉

『畜犬談』は一貫して語りが距離をとつて読まれる小説である。ただ、はじめはその頑なな思いこみや〈愚かさ〉が〈笑い〉を誘ひ、「私」の発言を真に受けさせないのだが、小説の進展にしたがい、表現のくり返しや〈空白〉の効果によつて、読者は彼が犬に自己嫌悪を投影していることや

ボチに親しみを覚えていることを察してゆくようになる。それに伴って〈笑い〉も語り手を「理解」させたうえでのものになってゆく。作者の「深刻」な心境と〈笑い〉とは、語りの構造から同時に呼び起こされているのである。

末尾でもそれは変わらない。いっけん作者がこの小説に託そうとした主題そのままであるかのような「私」の主張には、〈笑い〉が付されていた。だがその〈笑い〉とは主張を完全に骨抜きにしてしまうものではなく、言葉にすれば途端に硬直してしまう主題を表現するために施された仕掛けであった。

『畜犬談』以後、太宰の作品はしばしば〈笑い〉を指摘されるようになる⁽¹⁾。同時代において太宰が〈笑い〉の作家として認められていた面があったことはもつと注目されてよい。とはいえ、「こんど、ひとつ、ただ、わけもなく面白い長編小説を書いてあげませうね。いまの小説、みな、面白くないでせう?」(「晩年」に就いて、「文筆」昭和十三年二月)といった発言をそのまま受けて、〈笑い〉ばかりに目を向けて読もうとすればそれはまた作品の実態から離れてしまうことになるだろう。『畜犬談』の達成からは、語りの過剰や「家内」による相対化といった〈笑い〉をかもし出す効果が、一篇に不可欠な要素であったことがわかる。太宰治はただ読者を笑わせることだけに満足を感じていたわけではない。彼にとつて〈笑い〉とは、あくまで明確な意図に裏打ちされた方法としてあったはずなのである。

注

(1) 神山潤「編集後記」(「文学者」昭和十四年十月)、尾崎一雄「二人角力の面白さ」(「帝国大学新聞—遮断機—」昭和十四年九月)、長与善郎「文芸時評 現代新人の通性 自信のな

い基本作因」(「東京朝日新聞」昭和十五年五月三十日)。

(2) もつとも〈笑い〉が指摘されることがまったくなかったわけではない。尾崎一雄はすでに『ロマネスク』(「青い花」昭和九年十二月)について「ロマネスク」は大変面白かった。先づ、読んで面白い」と、『畜犬談』と同じような評価をしていた(「同人雑誌評」、「早稲田文学」昭和十年一月)。また春山行夫は『虚構の彷徨、ダス・ゲマイネ』(新潮社、昭和十二年六月)を「コメディ」だと指摘している(「新潮」昭和十二年八月)。ただ春山はあくまで「ジョイス以後に流行したジイドやシエストフの影響に生まれた」という文脈において、その実験性を評価しているのであり、『畜犬談』に対する「面白かった」という評価とは一線を画すと思われる。

(3) 「あとがき」(「玩具」、あづみ書房、昭和二十一年八月)には「甲府では私は本当に野良犬どもに悩まされた。はじめは大まじめで、この鬱憤を晴らすつもりで取りかかったのだが、書いてあるうちに、滑稽になってしまった」「書き終へて読みかへしてみたら、まるでもう滑稽物語になつてしまつてゐた」とある。ただし、以下本論で見ていくように、小説には冒頭から明らかに〈笑い〉をかもし出す表現が駆使されており、偶然滑稽になつてしまったかのように述べている点は顔面どおり受け取るべきではない。

- (4) 「畜犬談」 試論 (『太宰治研究 5』、和泉書院、平成十年六月)
- (5) 「研究展望」 (『太宰治全作品研究事典』、勉誠社、平成七年十一月)
- (6) 「太宰治と笑い」 序説 (『笑いと創造 第一集』、勉誠出版、平成十年七月)
- (7) 「太宰治「畜犬談」の笑いについて」 (『縦覧 Inspection』平成十年十二月)。
- (8) 神田鶴平「創作時評」 (『新潮』昭和十四年十一月)、鎌原正巳「太宰治著『皮膚と心』」 (『早稲田大学新聞』昭和十五年五月)。
- (9) 『太宰治論』 (新潮文庫、昭和五十九年六月)
- (10) 「畜犬談」 論 (『太宰治 心の王者』、洋々社、昭和五十九年五月)
- (11) 「評価」 (『太宰治事典』、學燈社、平成六年五月)。
- (12) 読者は距離を覚えて語りに触れざるをえない。ただ、語り手が意図的に距離を取らせているとは思えない。濱川氏の論では、語り手は笑う読者の反応を「計算済み」であり、わざと「非常識」な犬観を述べていると考えられている。しかし、語り手が「非常識」さを装っている証左、あるいは滑稽に語らねばならない理由は、作品からは読みとれない。作者に「計算高さ」が垣間見られるのはまちがいないが、語り手にそれを見るのは不適切に思われる。
- (13) 尾崎一雄は次のように述べている。「地平線でも水平線でもないが――つまり常識線と云つていいだらう――その線から突飛にはね上がった、また、無下に沈下したりする「私」に對し、その「私」の「家内」が、凝つと、常識線を固守して

ある、全然動かない、その対比が：無類に面白いのだ。：「私」の一人角力の面白さ、そしてそいつをしつかりととらへて描いてある面白さだ。」

- (14) 丸山俊氏は「太宰治の文学と笑い」 (『笑いと創造 第二集』、勉誠出版、平成十二年三月) で、「そろそろ秋風ふきはじめてきた現在」という作品中途に書かれた認識を、末尾を経たものだと考えている。だが、「(いま)」を示す言葉が作中に他にも多く見られるにもかかわらず「語りの現在」にはされていないことを鑑みれば、この認識も末尾以前のものであるのが自然である。

- (15) 濱川勝彦氏が「犬と自己或いは犬嫌悪と自己嫌悪の境界線が、曖昧になって来ている」と指摘している。

- (16) 『駆込み訴へ』 (『中央公論』昭和十五年二月) には次のような言葉がある。「私は、あの人を愛してはゐない。はじめから、みちんも愛してゐなかつた。はい、旦那さま。私は嘘ばかり申し上げました。私は、金欲しさにあの人に附いて歩いてゐたのです。おお、それにちがひ無い」このユダの言葉も、「あの人」への愛憎半ばする気持ちから生まれており、思い切るために自分に言い聞かせている様子が読みとれる。
- (17) かつて「私」は甲府の「赤いムク犬」たちを恐れていたし、また別の箇所では犬の「精神の卑劣」を非難していた。

- (18) 同年の作品『ア、秋』 (『若草』十月) にも「芸術家ハ、イツモ、弱者ノ友デアツタ筈ナノニ」という言葉がある。このことから「弱さ」の称揚が当時の太宰にとって重要なモチーフであつたことがうかがわれるのだが、一方で、『ア、秋』のこの言葉にしても「ちつとも秋に係ない」のになぜかノットされていた言葉だ、と断られることでもどかれてお

り、積極的な主張にはされていない。

(19) 山内祥史氏『太宰治論集 同時代篇』(ゆまに書房、平成四年十月) および『太宰治著述総覧』(東京堂、平成九年九月)によれば、『畜犬談』以後、太宰の小説はしばしばその(笑い)を指摘されている。創作集『女の決闘』(河出書房、昭和十五年六月)を中村地平は「初期に見られた不安のかはりに、一種のおほらかさや、フモールやが作品をおほつてゐる」とした(『太宰治著『女の決闘』、「新潮」昭和十五年八月)、『きりぎりす』(『新潮』昭和十五年十一月)に嵯峨伝は「ユモラスな筆致」を感じたという(『創作時評』、「新潮」昭和十五年十二月)、『服装に就いて』(『文藝春秋』昭和十六年二月)には「この作は滑稽」「微笑をもつて読まれる」という宮田戊子の評がある(『太宰治氏の『東京八景』其他』『近代日本文学の分析』霞ヶ関書房、昭和十六年十一月)、『禁酒の心』(『現代文学』昭和十七年十二月)は「面白かつた」、「気の利いたコント」と大井広介に評価された(『新著月評』、『現代文学』昭和十八年一月)。創作集『佳日』(肇書房、昭和十九年八月)は無署名によるものながら「この作者の持つ笑ひはいまの大方の読者にすすめたいものがある。苦しみを突き抜けて来た作者の掴み得たユーモアは世の万歳芸とは凡そ撰を異にしたたのしみとなぐさみを与へてくれる」と讃えられた(『佳日』太宰治)、『日本読書新聞』昭和十九年十一月)。

もちろん太宰の(笑い)が万人の好評を得たわけではない。宮内寒弥は『黄村先生言行録』(『文学界』昭和十八年一月)について「ずいぶん面白をかしい筈の小説であることはよくわかるのであるが、しかし、作者は才気によつて、その面白

さを売り込んでゐるやうな、面白がる読者の顔を先に心得てゐるやうな、そして、どことなくふざけてゐるやうなところがあつて、折角の小説でありながら、そのユウモアを解する境地に至ることが出来なかつた」と述べている(『文芸時評・或る暗示』、『新潮』昭和十八年二月)。また、澁川驍は「佳日」は彼の作品で最も類型の多いもので、誇張した身振で読者を笑はさうとしてゐるものである。(中略)しかしどうも人を見くびつた言葉がいくつも出てくるのにはムカムカした」と述べている(『新年号の小説』、『文芸』昭和十九年二月)。

いま、これらの作品や創作集についての(笑い)の肯定・否定的評価がそれぞれどこまで的を得ているかを論じる余裕はない。だが、たとえば「読者を笑はさうとしてゐるもの」を「彼の作品で最も類型の多いもの」としている澁川の批判から、太宰が同時代において良くも悪くも(笑い)を取りざたされた小説家であつたということが見えて来よう。

(さいとうまさお／本学大学院博士後期課程)